

# 国語

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

### 1 前 文

平成15年度から実施の高等学校学習指導要領を受け、平成18年度から試験科目が「国語Ⅰ」『国語Ⅰ・国語Ⅱ』から『国語』に1本化され、本年度は『国語』として4回目の試験である。

高等学校学習指導要領では、必修科目は「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の2科目とされ、生徒はそのいずれかを選択することとなっている。「国語表現Ⅰ」は適切に話したり書いたりする力など、現代の社会生活に生かすことのできる言語能力の育成を重視している。「国語総合」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び〔言語事項〕の3領域1事項から内容を構成し、古典と近代以降の文章を含む総合的な科目である。標準単位数は「国語表現Ⅰ」が2単位、「国語総合」が4単位である。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。検討を加える視点として次の5点を設定した。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標・内容等にそった問題（素材文・設問）であったか。
- (2) 高等学校における授業や学習活動の実態に配慮がなされた問題であったか。
- (3) 受験者の基礎的・基本的な国語力を幅広く総合的に判定し得る問題であったか。
- (4) 素材文は「国語表現Ⅰ」「国語総合」の教科書で扱われる程度のものであり、高校生が読むのにふさわしく、魅力的なものであったか。
- (5) 設問は、内容・形式・選択肢などによく検討が加えられ、受験者の読解・思考過程を想定するなどの配慮がなされていたか。

以上の視点に立ち、「試験問題の内容・範囲等」「試験問題の分量・程度等」「試験問題の表現・形式等」の面から、第1～第4問までそれぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

### 2 試験問題の内容・範囲等

第1問 栗原彬「かんけりの政治学」からの出題である。前段では、「隠れん坊」に一つの社会的意味を見いだした藤田省三の論文を出発点とし、小学六年生が語る「複数オニ」「陣オニ」の話から市民社会・管理社会の本質を考察していく。後段では、「かんけり」の話から現代社会に生きる私達が心の中で希求しているものを浮かび上がらせている。私達がふだん何気なく目にしたり行ったりしているものごとの中に、何らかの社会的、政治的、あるいは歴史的本質が潜んでいることが明らかにされていく過程は、評論を読むことの一つの大きな魅力であり意義である。そのような意味で、高校生が読む評論としてふさわしいものである。本文は、約4,600字である。

問1 すべて常用漢字からの出題である。(ア)「恒常的」、(ウ)「多寡」など比較的難しい問題も含まれ、適切な難易度であった。ただ、今回は設問及び選択肢に訓を問うものがなかった。素

材文及び問題作成上の制約もあるだろうが、一つ以上あることが望ましい。

問2 「変形した隠れん坊」である「複数オニ」「陣オニ」と「普通の隠れん坊」との違いを問うことは本文読解上必要である。正答は傍線部Aの直前の2文から作成されており、本文最初から傍線部Aまでの読解問題のように見える。しかし、選択肢吟味上は、傍線部Aの後の「複数オニ」「陣オニ」について述べた二段落を読む必要がある。さらに④の中の「コスモロジー」は前段最後に脚注付きで出てくる言葉であり、前段の最後の段落まで目を通す必要がある。結果的に非常に大きな範囲に目を通す必要がある問題となっている。

問3 「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」が「人生ゲーム」にどのようにつながっていくのかという観点から前段の内容をまとめる設問である。「身体ゲーム」が社会への適応訓練になっているということを読み取らせる上で、重要な部分を問うている。

問4 前段の論旨の流れを後段の結論へと転換させていく部分を読み取らせることを意図した設問である。「飽きることに飽きてしまう」という評論的表現は、ぜひ問いたい部分である。傍線部Cを含む段落の最後の2文から次の段落にかけての部分が正答の根拠となっているが、前段・後段を見通す必要もある。選択肢もよく工夫されている。

問5 「複数オニ」等とは違う、「かんけり」の持つ意味を読み取らせる設問である。傍線部Dを含む段落とその一つ前の段落に正答の根拠があるが、本文全体のまとめともなっている良問である。

問6 平成18年度から「論の進め方」にかかわる設問となり、昨年度は具体例や引用にかかわる「論の進め方」を問うという新しい工夫が見られた。今年度は具体例や引用を含めた「この文章の特徴に関する説明」という設問となった。これについては、昨年度の間6のように、同じ観点から作られた選択肢から正答を選ばせる形式の方が、設問としてより適切ではないか。

第2問 加賀乙彦「雨の庭」からの出題である。本文は3か月前を回想するところから始まり、途中から「父」の経歴が語られ、最後は回想している時点となって終わる構成となっている。その中で、家に対する「父」の思い、「父」に対する「彼」の思い、そして家に対する「彼」の思いが語られている。本文は、約4,800字である。

問1 3問とも、言葉の基本的な意味と文脈からの読み取りをうまく組み合わせた、やや難度の高い設問である。(ウ)の「はか」については、高校生の語い力を問う問題としては、本文中の他の語を問う選択もあったのではないか。

問2 長年住み慣れた家を手放す日が近づいたときの「父」の心情について、「彼」がどう想像しているかを問う設問であり、ぜひ問いたい場面である。

問3 傍線部Bの後から語られる「父」の経歴から、「父」の人生のどのような点に「彼」が「親密な思い」を抱いているかを読み取らせようとする、よく工夫された設問である。

問4 「彼」の家に対する思いを、「彼」自身が初めて口にする場面に関する設問である。選択肢は平易であるが、問5の「彼」の心情につながる問題である。

問5 家に対する「彼」の心情を読み取る上で、必要なところが問われており、適切な問題である。

問6 平成19年度から「表現の特徴」というように「内容」と切り離れた設問となり、今回も

同様である。比喻表現について書かれた④と、構成の特徴について書かれた⑤は、ぜひ読み取らせたい正答である。しかし、やや細部にこだわりすぎた選択肢もあり、誤答の作り方に工夫が必要である。

第3問 中世の御伽草子『一本菊』からの出題である。「兵部卿宮」が「兵衛佐の妹」に恋心を抱き、従者である「常磐」を使って和歌を何度も送るが結局返事をもらえないというやり取りの中で、「兵衛佐」と「常磐」の心情も描かれているという内容である。登場人物を整理し、恋心を伝える重要手段としての和歌の大意を読み取り、敬語などを手掛かりに、だれがだれに何をしたということなどを次々と読解していかなければならない。昨年度の問題に比べると、情報処理量は格段に多くなっている。字数は約2,100字と、これまでの大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）では最長の本文である。

問1 語句の解釈の設問である。(ア)「あはれ」と「ばや」の意味を確認する問題。(イ)「なべてならぬ」と「匂ひ」の意味を確認する問題。(ウ)「いかにして」と「思し召し寄り」の意味を確認する問題である。基本的な重要語が出題されている。また、辞書の意味だけでなく、文脈上の読み取りも必要とされている。解釈の問題として適切である。

問2 平成17年度以来の敬語の設問である。平成17年度は敬意の対象だけであったが、今年度は敬語の種類・敬意の主体・敬意の対象が問われており、このような問い方が望ましい。三つとも基本的な敬語である。波線部が地の文と会話文両方にあり、文脈の正確な読み取りを要求し、よく工夫された良問である。

問3 昨年度はなかったが、それ以前はほぼ毎年出題されていた和歌に関する設問である。ただし、平成3年度に掛詞、平成4年度に和歌的な修辞法、平成10年度に掛詞が問われて以来ずっと和歌についての問いは内容にかかわるものであった。今年度は修辞法を含めた「歌の表現技法とその効果」についての問いとなった。単なる和歌の修辞法の問題ではなく、文脈にそった和歌の理解も必要であり、出題意図は適切である。ただし、「適当でないもの」を導き出す根拠が、③の序詞の説明である点において、非常に難度が高い問題となっている。

問4 「兵部卿宮」の従者である「常磐」の心情を問う設問である。傍線部Xを含む一文の解釈が問われている。「ねたし」「めざまし」「便なし」「だに」などの基本的な重要語の理解を問うとともに、ここまでの文脈理解も必要であり、適切な問題である。

問5 「兵衛佐の妹に対する兵部卿宮の気持ち」の移り変わりを問うことで、本文全体にわたる内容理解を問う設問であり、ぜひ問いたいところである。選択肢はすべて2文から構成されているが、1文目の前半、つまり本文第1段落の内容理解によって正答が①に決まってしまう。選択肢に内容理解の深さの違いが問われるような工夫が欲しい。

問6 内容合致問題である。選択肢の誤答の根拠が本文の読解上重要な部分となっており、よく工夫された選択肢である。ただし、脚注が誤答の根拠となっている選択肢があることには疑問が残る。

第4問 侯方域『壮悔堂文集』からの出題である。「呉」が減びたのは、「西施」という女性に「呉王」が心を奪われたからではなく、遠い国にまで軍隊を出して戦争を続け国内の危機に対処できなかったからであり、その失敗はいつの時代にも起こり得るものだ、ということを論じた文章である。具体例をもとに論じ結論に至る構成、重要句法、故事成語など漢文学習に必須の内

容を含む本文である。総文字数は 191 字である。

問 1 熟語の意味を問う設問である。(1)は「寧」、(2)は「類」の意味を、それぞれ傍線部を含む一文を解釈する中で考えることを要求している。(1)、(2)とも基本的な問題である。

問 2 ほぼ毎年出題されている書き下し文にかかわる設問である。「而」「帰」「過」という語の読みと意味を確認する問題である。さらに、傍線部 A を含む第 1 段落は第 2 段落の内容をまとめたものであるため、第 2 段落の内容の理解度にもかかわる適切な問題である。

問 3 平成 13 年度以来の「行為の主体」の組合せの設問である。「呉」が滅びたのはなぜかということについて述べている第 2 段落の内容を理解するために、だれが何をしたかということの理解度を問うている。内容把握の問題として適切である。

問 4 「それぞれの文の表現と内容の特徴」についての設問である。五つの文に含まれている句法、故事成語、指示語、比喩などに注意を払いつつ総合的な内容理解を問うており、よく工夫された設問形式である。

問 5 第 3 段落の内容の把握を問う設問である。第 3 段落に述べられている「呉王」と「苻堅」の相違点と共通点を、「而レドモ」の逆接に注意しながら丁寧に読み取る必要がある。筆者の主張の根拠となる部分を理解させる上で、必要な問題である。

問 6 『元亀・格言』を筆者が引用した意図について問うることにより、筆者の主張を考えさせる設問である。よく工夫された適切な設問と選択肢である。

### 3 試験問題の分量・程度等

#### (1) 分量について

試験問題の本文の字数（文字数×行数）を過去 2 年間で比較すると、次のようになる。

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
第 1 問 評論	約 4,700 字	約 3,800 字	約 4,600 字
第 2 問 小説	約 4,900 字	約 4,300 字	約 4,800 字
第 3 問 古文	約 1,600 字	約 1,500 字	約 2,100 字
第 4 問 漢文	138 字	181 字	191 字

評論・小説は適当であるが、古文・漢文は本文の字数が増え、脚注と登場人物が多い。4 問全体を通してみると、分量としては限界に近いのではないかと。

#### (2) 設問数について

制限時間 80 分に対して、大問が 4 問、大問ごとの設問が各 6 問であった。この形式はセンター試験開始時の『国語』を含め、3 年前までの『国語 I・国語 II』においても変更はなく、本年度『国語』も従来どおりであった。解答数は 36 で昨年度の 38 より 2 減であった。細かく見ると、第 1 問評論は増減なし（11→11）、第 2 問小説も増減なし（9→9）、第 3 問古文で 2 問減（10→8）、第 4 問漢文は増減なし（8→8）であった。

#### (3) 難易度について

第 1 問評論は、論旨のはっきりした明快な文章であるが、本文の広い範囲から考える必要のある設問が多く、昨年度より難化した。第 2 問小説は、本文の長さや時間構成の複雑さにより、読

解に時間がかかる場合があったかもしれないが、正答を導きやすい設問が多く、選択肢も紛らわしいものが少ないため、昨年度と同程度の問題であった。第3問古文は、分量・脚注・登場人物が多い中で、人間関係や和歌・敬語などを適切に押さえつつスピーディに読むことが必要とされ、昨年度より難化した。第4問漢文は、設問と選択肢が素材文の内容・構成に応じてよく工夫され、昨年度よりやや易化した。全体的に見ると昨年度よりやや難化したが、5割台後半の平均点であり、センター試験としては、適切な難易度であった。

#### 4 試験問題の表現・形式等

##### (1) 表現について

特に問題点はない。

##### (2) 配点について

第1問から第4問までを各50点満点とする配点に変化はない。解答一つ当たりの最高点について見ると、第1問評論は昨年度と同じく8点と適切である。第2問小説は昨年度同様9点が2問ある。第3問古文は、解答数が二つ減ったため昨年度は7点であったが今年度は8点のものが2問となった。第4問漢文は、昨年度は8点であったが今年度は10点となっている。

全体的に本文の字数が多くなっている上に、1問当たりの最高点が大きくなっている。受験者の精神的負担を考えると、できる限り8点を最高点とすることが理想である。1問についての配点が過重にならないようこれからも配慮してほしい。

また、特に漢文だけに10点という配点を付ける必要があるのか。他の三つの大問と比べてややバランスを欠いているのではないだろうか。

##### (3) 形式について

選択肢については、5例から一つを選ぶものが32問、6例から二つを選ぶものが2問である。

#### 5 要 約（意見・要望・提案等）

本年度の平均点は115.46点で、昨年度の121.64点より6.18点下降した。過去10年間の中では、4番目に高い平均点である。受験者は484,871名で、昨年度より3,556名の増加となった。

来年度以降のセンター試験において本年度「国語」の経験を踏まえ、よりよい問題作りを進める上で参考とされることを意図し、意見・要望等以下に示す。

- (1) 本年度の本試験は、おおむね高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、総じて高等学校の授業実態についても配慮がなされていた。また、受験者が解答を進める中で、素材文の理解が深まるような工夫がなされていたことも評価したい。ただし4問全体を通してみると、分量としては限界に近いのではないか。
- (2) 得点結果については、5割台後半の結果が得られたことを評価したい。大学側が定める受験科目の範囲指定において古文や漢文を除外する場合があります。近代以降の文章である第1問と第2問のみ解答する受験者が存在する。第3問・第4問を解答しない受験者も含む平均点としては、5割台後半が妥当である。
- (3) 第1問について、身近な題材を通して現代社会のあり方を浮かび上がらせている興味深い内容であり、高校生が読む評論としてふさわしいものである。傍線部は、本文を理解する上で必要な

箇所には引かれており、選択肢もよく工夫されていた。本年度は、本文の広い範囲から考える必要のある設問が多かった。

- (4) 第2問について、取り壊される予定の家を見て、主人公の「父」と家に対する思いが語られていく短編小説の適切な部分を切り取って出題している。時間構成にそって登場人物の心情を味わいながら考えさせる設問となっており、小説の読解が進むように問題が作られている。
- (5) 第3問について、内容・分量とも難度が高いが、重要語・古典文法・敬語・和歌の修辞法・古典常識などをもとに、人間関係を把握し内容を理解する力が問われており、高等学校での日々の授業の成果を問う問題として、適切であった。
- (6) 第4問について、本文の中で問いたいところがすべて問われており、そのための設問と選択肢がよく工夫されている。内容・構成ともに妥当な素材文であり、適切な難易度である。